

香港日本人学校香港校中学部と現地校との交流

前香港日本人学校香港校中学部 教諭

兵庫県西宮市立上甲子園中学校 教諭 肥 後 綾 子

キーワード：在外教育施設、香港、現地理解、国際交流

1. はじめに

今回、縁あって香港日本人学校香港校中学部に赴任する機会をいただいた。3年間の赴任生活はとまどうことも多かったが、日本各地の先生方との出会い、日本人学校スタッフの方々との出会い、日本人学校生徒たちとの出会いの中で、多くを学ぶことができた。日本にはなかなかできないさまざまな経験の中で特に印象的だった、現地校とのさまざまな交流を紹介したい。

2. 香港日本人学校の概要

(1) 香港とは

香港は、中華人民共和国の南部に位置する特別行政区である。東京23区の2倍の範囲に700万人を超える人々が暮らしており、世界でも有数の人口密度である。多くの香港人は、いわゆるペンシル型のマンション(フラット)に住み、男性も女性も仕事をもつ人が多い。また、世界的な金融都市であることもよく知られている。他にもフィリピンやインドネシア、マレーシアなどから多くの女性が働きに来ており、街を歩くとさまざまな人種の人々や言語に出会う。日本人は2万6千人余りが在留しており、駐在員やその家族、結婚などで現地に長く滞在している人たち、レストランや美容院などを自ら経営している人たちなど、多岐にわたる分野で活躍している。

(2) 香港日本人学校香港校

①小中統合

香港日本人学校中学部は、1966年、銅鑼湾に小学部が設立され、翌年6年生が進級したことに伴い開設された。2016年、創立50周年式典が挙行され、香港校、大埔校、中学部、国際学校4校の歴史とともに、未来への飛躍を誓い合った。

中学部自体は、香港島の北角(North Point)の山手に位置する寶馬山(Braemar Hill)に学舎があり、1982年から2018年3月まで中学部のみで教育活動を行ってきた。しかし、生徒数減による香港校小学部との統合が決定し、2018年4月から同じく香港島の藍塘道(Blue Pool Road)に移転した。移転に伴い、名称も「香港日本人学校香港校中学部」となった。2019年3月現在で、3学年合わせて200名近い生徒が在籍している。

②中学部の活動

生徒たちは、統合する前も統合後も、さまざまなことに意欲的に取り組んでいる。日本の中学校で行われている修学旅行や職場体験、百人一首大会、校外学習、体育大会、合唱発表会など、どれも総合的な学習の時間や各授業を通じて多くのことを学んでいる。いずれの場合も実行委員を募り、その生徒たちがリーダー役となって他の生徒たちを引っ張っていく。また、校務分掌に「研修部」があり、年間のテーマを決めているが、ここ数年「少人数での話し合い活動から広がる学び合い」がテーマになっているので、班活動や係活動も活発である。それぞれの役割を自覚し、果たしていく経験を積むことで、自己肯定感を高め、次のステップに向かっていく力を付けている。自治活動でいえば生徒会活動も活発で、日々の委員会活動や行事も学校全体で取り組んでおり、生徒会執行部は中学部全体のリーダーとして活躍している。後述する現地校との交流においても一役買う場面がある。

他には、週に2～3回部活動があり、放課後はそれぞれのところで頑張っている。日本のようにグラウンドがないため、統合前は隣のチャイナ・インターナショナル・スクール(CIS)と一緒にグラウンドを使い、サッ

カーやテニス、ハンドボール部などが汗を流していた。統合前も統合後も体育館がそれぞれあったので、体育館でできる部活はそこで活動していたが、統合後はCISと離れたため、近くのコートやグラウンドなどを借りて部活動を実施している。日本のように時間をかけてじっくり取り組むことは難しいが、できることをできる時間で効率的にやっている。



CISと共同で使っていたグラウンド（白い建物は中学部）

3. 現地校との交流

(1) 生徒たちの交流

中学部では、各学年で次のように現地校との交流を重ねてきた。

1年… 香港中文大学の学生との交流、^{けいかざん}桂華山中学、^{すんけい}宣基中学との交流

2年… 香港中文大学の学生との交流、西安(修学旅行先)の大学生との交流

3年… 香港大学での交流

各学年、交流のあり方をそれぞれ考え、実践している。1年生では香港についての調べ学習を進め、香港中文大学の日本語を学ぶ学生たちにアドバイスをもらうということをしている。その上で完成させたものを「ガイドブック」という形や「壁新聞」という形で発表している。また、現地の中学校とは、合唱やゲームなどを通し、ふれあうことで互いを知り、交流を深めている。^{すんけい}宣基中学は香港人の子弟が多く、交流したときは日本語が少しできる生徒がおり、簡単な通訳をしてくれた。^{けいかざん}桂華山中学は多岐にわたる国籍の生徒たちが在籍しており、英語が通じない場面もあって、動作や笑顔でお互いにコミュニケーションをとっていた。いずれにしても、それぞれの学校の特徴があり、意義ある交流になっている。

2年生では1年次に交流した香港中文大学の学生たちの多くが再び交流に参加してくれる。香港の新界(New Territories) 地区にある^{ゆんろん}元朗地区を班で回る活動に帯同し、案内してくれたり、回る場所の説明をしてくれたりする。元朗地区は、香港の歴史的な建造物などが残っている地域で、現代的な香港だけを見聞きしている生徒たちにとっては少し違う香港を見られる場所である。生徒たちも事前に調べていくのだが、学生たちもよく調べてくれており、香港という外国の地であっても、安全に楽しく校外活動ができています。残念ながら香港の現地語である広東語を話せる生徒は多くないので、英語や日本語での交流になるが、その広東語や英語を学ぶ貴重な機会にもなっている。修学旅行先の中国・西安では、先述した香港中文大学学生との交流を生かし、西安の学生たちには班で市内の観光地を回る活動に帯同してもらっている。こちらも日本語を学ぶ学生たちで、とても親身になって交流してくれる。西安の博物館で、展示されているものの説明や案内をしてくれ、学びを深める手助けをしてくれている。西安という大きな都市で、慣れない外国の街を歩くという経験が学生たちの助けを借りてできるのも、本当に貴重な経験と言える。

3年生では、香港大学を訪問し、意見交流を行っている。その際、英語でプレゼンテーションができるように準備し、そのあと交流会を持っている。なお、3学年とも交流の際は合唱を披露している。

香港のことに限らず、日本でも体験型の校外学習が増えているようだが、海外でもそれができるという点で、このすばらしい取り組みが続いてほしいと願っている。

また2018年度は、中学部から生徒会執行部が軒尼詩道官立小学校(Hennessy Road Government Primary School)との交流を行った。このときは在香港日本総領事館の仲介で、香港教育局局長楊潤雄(Mr. Kevin) 長官が来校され、学校紹介やスピーチ、卓球での交流を楽しむことができた。軒尼詩道官立小学校の皆さんはとても温かく迎えてくださり、日本語、英語、広東語を交えた意義ある交流となった。



Kevin 長官、軒尼詩道官立小学校の皆さんと

(2) 教師同士の交流

香港では、中学部でも統合先の香港校小学部でも、周りに学校が多かった。1・2年目は、同じ寶馬山にある聖貞徳中学(St.Joan of Arc Secondary School)との交流があった。お互いの学校の授業参観、交流会をもち、意見交換をしてきた。

聖貞徳中学はもともと男子校だったのをここ数年で男女共学とした学校で、授業は大変落ち着いた中で進んでおり、教師はホワイトボードやパソコンを使い、生徒たちは熱心にノートをとっていた。理科・技術・美術・数学を合わせた「STEAM教育(Science, Technology, Engineering, Mathematics, Artを統合的に学習する)」を展開し、生徒たちは話し合い、教師にアドバイスをもらいながら、ドローンなどの作品を作っていく。授業は広東語、英語で行われている。香港では中学生になるとき、広東語での中学に進学するか、英語での中学に進学するかの選択(試験)があり、将来に関わってくる。一方部活動もあり、バドミントンやバスケットボールをしている様子があった。ただ、この学校も日本のように運動場はない。

中学部に来ていただいたときは、先生方は非常に熱心で、交流会では日本の教科書に興味をもたれたり、合唱発表会に興味をもたれたり、香港にないものについてずいぶん熱心に質問をされていた。

3年目は中学部が移転したことに伴い、近隣の学校としてフレンチ・インターナショナル・スクールとの交流があった。こちらはフランス人やフランスに関係の深い生徒たちが通っている。日本でいう小学生から高校生まで在籍しており、フランス語や英語で授業が実施されていた。

こちらは夕方まで授業が実施されており、生徒たちはクラスルームというよりは自分で選択した授業を受けていた。教師は主にパソコンを使い、授業をしている生徒たちもパソコンを持参しており、調べることがすぐにでき、課題もそれで仕上げているようだ。

余談になるが、海外に来て初めて知ったこととして、多くの生徒たちはスクールバスを使う。これは日本人学校も香港の学校もインターナショナル・スクールも同様である。香港では小学生は自分ひとりで通学せず、必ず大人が連れてくることになっているので、このシステムになるのだろう。これは他の海外だともっと厳密だろうと考える。なお、中学生以上だと自分でも通学できるので、公共交通機関を使って通学する生徒もいる。

(3) 現地校と交流してみて

現地校と交流してみても、IT化が進んでいると実感している。日本では黒板、ノートでやってきたが、それだけでは今後は進められないと感じている。パワーポイントを作らせてみると、視覚的な効果や生徒たちの自主的な活動を促す手段としても効果があると感じる。自分自身がITに関する意識を高め、使えるように勉強していかなくてはならないと考えている。

また現地校では、英語や外国語を率先して取り入れ、その言語で授業を進めている。中学部(香港日本人学校全体)でも英語に力を入れており、日本の生徒に比べてずいぶん進んでいると感じるが、海外に出てみて、母国語以外の言語を学ぶ機会が多いことを知った。このことはぜひ日本で向き合う中学生に伝えたい。一方で、日本語や国語をしっかり学ばせた上での外国語になると考えるので、日本語の表現やその豊かさは、折に触れて伝えていきたい。

もう1つ実感したことは、直接交流することの大切さである。お互いを知らないことから来る思い込みや偏見は、直接交流することで解ける。これは大人も子どもも一緒である。お互いを思いやり、交わり合うことで身近に感じ、さらに相手に興味をもてる。そんな機会をもつことができた。日本人学校に在籍できたからこそもてた機会である。

4. おわりに

まず、在外教育施設に赴任するという機会を与え、関わってくださった全ての方に感謝したい。失敗も多かったが、それを次に生かすことができるという小さな自信にもなった。日本各地から来ている同僚たちからも大いに刺激を受けた。帰国してそれぞれのところで頑張っていることを思うと、自分もそうありたいという意欲につながっている。

ところでこれもまた余談になるが、日本人学校の補習校で授業をする機会をいただいた。日本にルーツを持っているが、さまざまな理由で日本語を母国語としていない児童生徒たちである。普段は現地校やインターナショナル・スクールなどに通い、土曜日に日本語を習いにやってくるのである。そのような生徒たちを相手に、今回は「五・七・五」の言葉遊びをやってみた。川柳はやったことがあるという補習校の先生のアドバイスもあり、最終的にはなんとか形になって終えることができた。自分の知っている言葉をつなぎ、表現する生徒たちから、日本語の豊かさを改めて教えられた授業となった。中には、普段出さないような深い思いを綴ってくれた生徒もいて、やってみてよかったと実感することができた。現地校交流とは少し違うのだが、香港やその他の国で過ごしてきた生徒たちとふれあう機会を持つことができ、貴重な体験となった。